



特別寄稿

## 文学遺跡巡りの楽しみ

国語科 瀬尾邦雄

青年時代からこの歳に至るまで全国各地の文学者緑の記念館や文学碑を訪ねるのが趣味である。その緑の地に立つと先人の息づかいが聞こえ、命が踊る。恰も文学者達と会話をしているかの如き思いに駆られる。

十代、萩原朔太郎の詩に痛く感動した私は、将来、朔太郎の生家前橋を訪れたいと思っていた。その後、宿願が適い朔太郎の出生地前橋を訪れた時「詩人は生まれるべくして生まれた」というのが私の卒直な感想であった。そこには、朔太郎を生んだ自然と風土、思想と文学、生活等が息づいていた。以来、感銘を受けた私は作家緑の地や文学の舞台を歩くのが趣味となり、現在までに多くの地を訪ねてきた。

白樺派文学に傾倒した時などは、手賀沼に魅せられ10数回訪れた。東京からの来客があった時なども客人を案内し、共に散策を楽しんだ。そして、手賀沼で執筆された直哉の『和解』『暗夜行路』談義となった。ここには武者小路実篤邸・志賀直哉邸跡・バーナードリーチ碑・杉村楚人冠碑等もあり手賀沼は思い出の尽きない場所である。更に、実篤が開いた埼玉県毛呂山町の「新しき村」にも足を伸ばし、直哉や梅原龍三郎・中川一政らが高く評価してやまない日本画を間近に見、画人としての実篤の新局面を発見した。

金沢を訪れたのは暑い夏であった。まず最初に訪れたのは煉瓦造りの石川近代文学館だった。ここでは金沢出身の泉鏡花・徳田秋声・室生犀星等の基礎知識を学び、その夜は犀川の辺に宿を取った。ここを選んだのは犀星の生家跡や緑の地を訪ねるためである。翌朝、河畔にある「あんずよ花咲け地ぞ早に輝け、あんずよ花着けあんずよ燃えよ」と犀星が妹

を謳った詩碑を訪れた。次に、卯辰山に登り自然主義作家徳田秋声の文学碑を見学した。碑は市内を一望する望湖台の入り口に建ち、金沢の土塀に象っていた。秋声を絶賛した犀星の筆による年譜と、秋声自筆の文章が陶板に刻まれていた。しかし、金沢はたった2日間の滞在であった。後髪を引かれながらも、大伴家持や折口信夫・春洋緑の能登半島一周へと急いだ。羽咋市の海岸では天平20年(748)春に家持が「妹に会はず久しくなりぬ饒石河清き瀬毎に水占延てな」と詠んだ、大伴一門の期待を一身に受けた若きプリンスの自負と悔しさの世界に思いを馳せた。

豊島区の雑司ヶ谷墓地は私にとって文学教材の格好の場であった。桜の季節、落葉の季節を問わず数知れず訪れた。夏目漱石の墓前で読書をする若者を何度も見かけた。当時としては珍しかったであろう永井荷風の墓石が、戒名ではなく実名であったのを今でも新鮮に覚えている。サトウハチローの墓碑には「ふたりでみると、すべてのものは美しくみえるサトウハチロー」と刻まれていた。また、ここには泉鏡花・小泉八雲・松井須磨子等々多くの文人や著名人の墓碑があり日本文学の学習には事欠かなかった。

結局、私にとって文人達の生まれ故郷踏査や文学遺跡巡りは、文人達の精神史の探索であり、等身大の文人探求であり、世界観の探求であり、人間研究でもあった。また、文人達との語り合いの場でもあるが、それが、私の創造力と活力源ともなっている。そして、文学の軌跡を追うことは自己の精神史の再認識であり、自覚であり、汝自身を知るための自己研究ともなっている。